

令和4年度(2022)第2回出雲市総合教育会議会議録

令和4年(2022)12月20日(火)午後3時00分、令和4年度(2022)第2回出雲市総合教育会議を出雲市役所3階大会議室に招集した。

次第

- I 市長あいさつ
- II 教育に関する諸課題について
 - (1) ICTを活用した学校教育
 - (2) 出雲科学館のさらなる充実について
 - (3) 不登校対策について
- III 教育長あいさつ

出席者名簿

出雲市総合教育会議

市 長	飯 塚 俊 之
教 育 長	杉 谷 学
教 育 委 員	金 築 千 晴
教 育 委 員	内 藤 祐 馬
教 育 委 員	高 橋 詠
教 育 委 員	川 田 量 子
副市長(オブザーバー)	伊 藤 功

教育部

副 教 育 長	安 井 孝 治
教 育 部 次 長	山 崎 創
教 育 部 次 長	園 山 裕 二
教 育 部 次 長	金 築 健 志
教育政策課 課長	常 松 博 雄
学校教育課 課長	福 間 耕 治
学校教育課 主査	山 本 芳 正
児童生徒支援課 課長	松 井 博 之
児童生徒支援課 課長補佐	妹 尾 博 貴
出雲科学館 館長	鬼 村 修 治
教育政策課 課長補佐(書記)	池 尻 精 二

(常松教育政策課長)ただいまから、令和4年度第2回総合教育会議を開会いたします。開会にあたりまして、飯塚市長が一言ごあいさつ申しあげます。

I 市長あいさつ

(飯塚市長) 本日は、年も迫ってきまして、大分冬モードになったところですが、教育委員の皆様には、お出かけいただきありがとうございます。

この会議は、令和4年度(2022)第2回出雲市総合教育会議でございます。6月の第1回に引き続き、今年度2回目でございますが、市長である私と教育委員会が情報を共有し、意思統一を図る場でございます。

昨日までの12月定例会をしておりましてところですが、6月にこの会で説明し、9月に議決を経ました出雲市総合振興計画「出雲新話2030」のアクションプランである基本計画を今回策定をしております。これから、本格的にこの計画に従い施策を進めていくこととなるところでございます。

本日は、ICTを活用した学校教育、出雲科学館のさらなる充実、不登校対策の3つのテーマについて、みなさまと意見交換をさせていただきたいと考えております。いずれのテーマにつきましても、これからの出雲市教育において、重要な課題・テーマだと思っております。特に、デジタル・ファースト宣言をした本市としては、タブレットを使った教育については力をいれていきたい分野であると考えておりますし、また、12月議会でも児童生徒支援課の方から報告しましたが、不登校について、全国と比べますと依然として不登校の児童生徒数が多い状況にある中で、その理由が多様化、あるいは本人も理由がわからないような複雑化してきている状況になってきております。この対策について、待たなしの状況であると危機感を抱いているところでございます。

本日は、限られた時間ではありますが、委員のみなさま方と意見交換を行い、これからの出雲市の教育施策の取組みなど、未来に向けた建設的な議論ができればと考えておりますので、忌憚のないご意見をいただきますようお願い申しあげまして、冒頭のあいさつとさせていただきます。今日は、どうぞよろしくお願いたします。

(常松教育政策課長) それでは早速、協議に入ります前に資料のご確認をお願いいたします。資料6つ付けております。みなさまでございますでしょうか。資料1 出雲市総合教育会議設置要綱、資料2 ICT活用教育推進事業、資料3 出雲市のICT活用教育推進事業(令和4年度)、資料4 出雲科学館のさらなる充実について、資料5 出雲科学館の理科学習に係るアンケート集計結果(全学年)、資料6 不登校対策について、事前にお配りしております。よろしいでしょうか。それでは、資料1「出雲市総合教育会議設置要綱」をご覧ください。この総合教育会議につきましては、市長と教育委員が教育も含めた市を取り巻く様々な課題の協議・調整を行うことで、市政や教育行政の様々な課題に効率的に取り組むことを目的としています。資料1の第2条第2号にあります「出雲市の教育を行うための諸条件の整備その他の地域の実情に応じた教育、学術及び文化の振興を図るため重点的に講ずべき施策」として今回、3つの議題について、協議や意見交換を行っていただく予定としています。また、本会議につきましては、第4条第1項の規定によりまして、市長が議長となり進行を行うこととなっております。これからは、市長に進行をお願いい

たします。

Ⅱ 協議事項

◎教育に関する諸課題について

(1) ICTを活用した学校教育

(飯塚市長) それでは、早速協議事項に入りたいと思います。協議事項が3つある中の(1) ICTを活用した教育につきまして、福間学校教育課長から説明願います。

(福間学校教育課長) (資料を用いて説明)

(飯塚市長) 福間学校教育課長から説明させていただきました。この内容は、高橋委員から希望があったものと伺っております。また、11月9日の学校訪問では、委員のみなさんが実際に学校現場でタブレットを用いた授業を視察なさったと伺っております。さきほどの説明の内容、学校で見た内容、あるいは家庭での状況など、何でも結構ですのでご意見をいただきたいと思います。高橋委員、最初をお願いします。

(高橋委員) 気になっているのは、出雲市全体が導入して、かなり差が生じているというところがやっぱり気になるところです。視察に行かせていただいた学校は、ドリルなんかも結構、授業で使ったりとかして、進んでいるなっていうふうには思いました。聞く話によると、まだほとんど使ったことないよという保護者さんの声もあったりします。差がかなりあるところがちょっと気になります。先生方もかなり忙しいと思うので、そういうことが得意な先生方はおそらくやられると思うんです。そうじゃない先生方の研修となると、お忙しい中、受けていただけるのかわからないのです。けれども、もう少し差が縮まっていくようにならないのかなっていうふうに思うのです。

(飯塚市長) 福間学校教育課長。

(福間学校教育課長) おっしゃる通りです。説明しましたように教員の指導力、活用能力というのが直接、子どもの活用に結びついています。これまでは使えない人を対象に特化した研修はやっていないのです。けれども、今後は、対象とした研修を行うことによって、先ほど基本計画の目標に掲げているのですが、ほぼすべての教員がきちんと使えるように、指導できるというところを、なるべく短期間で目指していきたいということを考えています。

(飯塚市長) 高橋委員。

(高橋委員) 目標的に令和6年に向けてですか。それとも、もう少し早い段階で全体が揃っていきような目標を掲げておられるとか、そういうものはあるんでしょうか。

(飯塚市長) 福間課長。

(福間学校教育課長) 先ほどの新たな基本計画では、令和6年度に100%というふうに書いています。100%というのは、難しいことかもしれませんが、それに限りなく近づけるようにやっていきたいと思っております。

(飯塚市長) どこの学校の何の教科を視察されたんですか。

(池尻教育政策課課長補佐) 視察は、中部小学校、西野小学校、今市小学校、第二中学校です。

(飯塚市長) 4校ですね。川田委員。

(川田委員) 今、視察のことが出たので、私の感想を述べさせていただきたいです。私もずっと英語を高校の現場で教えているのですが、使うことが目的になったら嫌だなんていうのが私の正直な思いです。使わなきゃいけないから不便だけど、とりあえずこれやろうみたいな感じになって嫌だなんて思ってたところ、二中の英語の授業を見たのです。二中の英語の授業は、子どもたちがみんなタブレットを見て、先生もタブレットを見て、それでコミュニケーションの授業でどうなのかなってというのが心配だったんですけれど、すごく上手に教室をコントロールしておられて、非常に好感が持てました。ああいうのを見て、ちょっとした事なんですけれど、タブレットでみんなの答えを映したりとかグループワークしたりとか、子どもたちも非常にそれを使うことで、さらにコミュニケーションが取りやすいというか、ただ何もなしで話すのは難しいけれど、タブレットを通じていろいろ話してる姿見て、こういう使い方とってもいいなと思いました。苦手な方の気持ちがすごくわかるので、私もやると嫌なんですけど、何か抵抗感があると思うんです。これを使って授業しなきゃいけないって、何かすごくハイテクなことをやらなきゃいけないっていう気持ちがするんですけれど、本当にスモールステップで進められたらいいんじゃないかと思います。プレッシャーにならないように進められたらどうでしょうか。すごくいい視察をさせていただきました。

(飯塚市長) 注文みたいなことはよろしいですか。アドバイスといたしますか。

(川田委員) 紙で出来ることをわざわざっていうのは、少しおかしいかなっていう気もして

いたんですけど、先生方が便利な使い方ができればいいなど。アンケートを取るとか、丸付けするとか、そういう先生の負担にならないと言うところが私の希望ですね。それがまた負担になって、授業が大変になると、大変だと思います。便利な使い方などいろいろ事例を交えて、研修していただきたいと思います。

(飯塚市長) 福間学校教育課長。

(福間学校教育課長) 先ほど委員仰ったように、瞬時に多くの情報が集約できて、提示できるってところが一番大きいのかなと思っています。先ほど説明したスカイメニュークラウドというのはそのソフトなんですけれども、そこがまずうちの先生方に求めるというか、その力をつけていただきたいということで、その研修というのは多くやっております。今後も、まずはそういうことができるように研修をしていきたいと思っています。効果的な活用をしないと意味がないというご意見だと思います。まさにその通りでございます、今後そうしたどういう教科で、どういう場面で、どういうふうにするのかということも、これまであまり経験がありませんので、蓄積がないのです。そうした情報活用事例を収集して市としてはどんどん発信していきたいと思っています。今、実は、ICT支援員さんが、そういった事例を各学校回りながら紹介してくれています。そういったところで、活用を進めていきたいというふうに思っております。

(飯塚市長) 金築委員。

(金築委員) 先ほどICT支援員さんのお話をされたんですけど、3人役、1日3人の方が学校行っているということですか。

(飯塚市長) 福間学校教育課長。

(福間学校教育課長) その通りです。

(飯塚市長) 金築委員。

(金築委員) この3人の方は、学校が要望して来てくださいと言ったら、来てくださるんですか。

(飯塚市長) 福間学校教育課長。

(福間学校教育課長) 1日3人がどこかの学校行ってるという形です。年間の派遣回数とい

うのが、業務委託の中で決まっております。派遣可能日に、どこの学校に行くかというのは、当初に各学校から要望とり、調整を図ったうえで、年間計画を決め、派遣しているということです。来てもらいたい時に、来てもらえるってのが一番いいかもしれませんが、なかなか非効率の部分がございますので、現在は、計画した上で訪問してもらっているという形です。

(飯塚市長) 金築委員。

(金築委員) 今後増やされる予定は、3人だと、何か少ないような気もするんですが。

(飯塚市長) 福間学校教育課長。

(福間学校教育課長) 現状は、今年度からこの人数で始めさせていただいて、非常に効果があるというふうに思っております。現状は、この人数というところで考えております。請け負っていただいている業者さん自体、初めてということがございました。大分慣れていっちゃって、いろいろな蓄積ができておりますので、むしろ、その内容の充実というところを考えていきたいと思っております。

(飯塚市長) 金築委員。

(金築委員) ありがとうございます。デジタルドリルという言葉は聞いていますけど、見たことがなくて、実物を見せていただくことは可能ですか。

(飯塚市長) 福間学校教育課長。

(福間学校教育課長) 可能でございます。定例会などで、実物で実演を行いたいと思います。

(飯塚市長) 金築委員。

(金築委員) ありがとうございます。前回の学校訪問に行けなくて、非常に残念でした。前の学校訪問のときもやっておられるのを見たことがあります。非常に子どもたちも生き生きとやっていて、楽しそうでした。子どもたちは、やっぱり視覚から入る情報の方が、入りやすいみたいです。耳で聞くよりは、目で見ただ方がずっと入ってくる形が割と多い気がしています。楽しそうに画面を見ながら、和気あいあいとやられて、ここをもっともっと新しい授業が提案できていけば、ちょっと授業につまずきかけた人たちもどこかのきっかけで参加できたりする。そういった部分を見回してやっていかれるととてもいいと思って

います。

(飯塚市長) 内藤委員。

(内藤委員) この資料の中の(4)番のICT活用教育推進状況についての中で、学校としての取り組み体制が弱いて書かれてるところなんですけど、これは学校それぞれによって差があるってことでしょうか。

(飯塚市長) 福間学校教育課長。

(福間学校教育課長) 残念ながらその通りだと思っています。もちろん校長のリーダーシップもあるかもしれませんが、詳しい先生が1人いるかどうか。その人が例えば中心になって先生方みんなで教え合いしながら活用していこうという学校もあれば、なかなかその得意な人がいなくて進まないというような学校もあります。そういうことがあるので、ICT支援員の派遣を始めたところです。多少その学校によって活用に向けての取り組みということについて、組織的に出来ているかどうかというところで差があるのかなというふうに感じているところです。

(飯塚市長) 内藤委員。

(内藤委員) 僕は、データの蓄積だと思っています。各学校でデータを蓄積されてるのか、それとも出雲市として一括で管理されているのか。何かそういうものはあるのでしょうか。

(飯塚市長) 内藤委員。

(福間学校教育課長) データというのは、例えば、どういったものでしょうか。

(飯塚市長) 内藤委員。

(内藤委員) 授業の件で言わせてもらうとなかなか今の現状では、教科書を使っておられて差がないなと思ってるのです。各学校で作られてるデータが結構あると思うのです。アンケートにしても、何にしても、こういったデータが蓄積されてなければ、新たに作られて、そういったことが多忙化に繋がってるんじゃないかっていうところが、言いたかったんです。やり方は、いっぱいあってこのクラウドっていうものをしっかりと使って、蓄積させて、それを分析していろんなことをやっていかれると意味があるのかなって思っているのです。各学校で、これを使っておけばいいかっていうのが、すべて統一されてくるのか

など思うのです。その辺もう少し分析するというのを各学校でやっていければいいんじゃないのかなと思ってます。

(飯塚市長) それは、授業のデータを蓄積するというのと学校自体のICT化をいろんなところでやっていくってということで、多忙化を解消していくということでしょうか。

(内藤委員) 授業もそうなんですけれども、授業も自分たちでこしらえてらっしゃるところもあると思います。そういったものが、例えば他の学校で使えたりすることとなると、これまでつくれなかった人もそのデータを使って授業することが可能になってくるんじゃないかなと思ったりもします。もう一つは、日々の業務の中、例えば子どもにアンケートとりましたってその蓄積の中で、この子は今、例えば不登校になってます。その後には、何で不登校になったのかなっていうデータも作れる可能性、そういうものが蓄積されてあるならば、分析もできたりするのでないかなと。クラウドをもう少し細かく使っていき、しっかり使っていかれると、何か分析するものがあるって、それに対する解決策ってというのがいっぱい出てくるんじゃないのかなという提案です。今、どうなっているのかよくわからないんですけど、クラウドを各学校で使うのかそれとも出雲市が一元で管理されるのかってところが、やっぱり必要になってくるのかなと思っています。

(飯塚市長) 常松教育政策課長。

(常松教育政策課長) 現在、出雲市の教育委員会と学校間の共通のサーバーがあります。そこに全体で共有できる共有フォルダーと学校の内部だけで管理できる共有フォルダーがあります。いろいろなデータを学校内部で共有してるというのは多いと思うのです。学校間までというのは、まだ、少ないのかなと思います。各学校、各学年同じ教科書を使っておられますので、その授業のテンプレート的なものっていうのは共有して作っていきけるんじゃないかなと考えています。残念ながらそこまでには、至っていない状況です。今、先生方も過去の授業のこれまでの蓄積、授業準備のパターンがありますのでそういった自分の資産を少しずつ、直しながら使っておられるのがほとんどではないかなというふうに思っています。多忙化解消プランの関係で先生にヒアリングしますと、なかなか授業準備だけでも大変だと。小学校においては6時間の授業を全部作るかというとなかなかできないので、教室に向かうまでに準備をするみたいな状況のところもあります。なかなか一つずつの授業ってのは難しいかなと今の実態として思っております。ご提案いただいた仕組みというのは活用できるのではないかなと思っておりますけれども、そこには少し時間と誰かが作って待っているということになるとなかなか難しいので、何か使えそうなものを一つでもやってみて、いろんな意見を取り入れながら、新たなパターンがつかれるのではないかなと思っています。現在は、そういったところまでには至っておりません。

(飯塚市長) 内藤委員。

(内藤委員) ICT支援員は、何かを作るっていうことはなくて、聞かれたことに対して受け答えをすとか、過去誰かがやったものを紹介するだけにとどまっているのか、例えば一緒になって作ってもらっていうことは可能なかどうか。

(飯塚市長) 福間学校教育課長。

(福間学校教育課長) 自ら何かを開発してもらうことは、業務委託の中に入っておりません。教員が、作成方法ですとか、尋ねられた場合に例えばソフトの操作方法ですとか、アドバイスをするというのが役割かなと思っております。ICT支援員さん、委託会社と情報交換を行う中で先ほどのような、例えば活用事例の共有を自社ができるというような意見もありました。別料金ということでした。今の支援の業務では、授業の中で入って支援、教材作成の支援、アドバイス、研修の補助をするというような形です。あくまで、支援役という形です。

(飯塚市長) 内藤委員。

(内藤委員) それだけしかできないならば結構です。今後どこにお金をかけていくかっていうところで、そういったこともやられてもいいのかなと思いました。最近、世の中で騒がれたのが、こういった携帯やタブレットを使って、脳に少しストレスというものが掛かっているのではないのかと、言われはじめた状況です。逆に言うと後からストレスが溜まっているのではないですかという意見が出てくるのではないかと思います。また、不登校のところでも話題となるのではないかと。今対処するのか、後々大きく問題が広がってから対処するのかどうかで違ってくると思っています。子どもたちにとっては、変わった生活をしているのでストレスが少し溜まってくると思います。その辺りのケアについてもいろんなことを考えられた方がいいと思っていますところでは。

(飯塚市長) 取組状況か何かありますか。福間学校教育課長。

(福間学校教育課長) 特にメディアとの接触時間は、気になっているところです。学習状況調査を見ると、本市でも年々、増える傾向にあります。市としては、適切な使用時間の設定等について、家庭の方にルールづくりを促しながら、過剰にならないようにやっていきたいと思っています。

(飯塚市長)内藤委員。

(内藤委員)これは、保育園や幼稚園にも言えることと思っています。今、親が忙し過ぎて、これをポンと与えるという家庭が結構あります。そう言ったこともチラシではないですが、張り紙をしてやっていくというのも一つの手かなと思っています。

(飯塚市長)杉谷教育長。

(杉谷教育長)いろいろご意見いただいていることについて、私なりのちょっと思いを述べます。今回、ICTを活用した学校教育というテーマなので、教育の部分とか、一部事務の部分というのもあります。今、大きくその健康と言うんですか、子どもに与えるこのICTの影響ということでお話が出ています。授業で使うということについての私の思いは、こういうことを子どもに教えないといけないと思ってしまうと教員が相当辛いだろうなど。さっきの川田委員さんが仰るように、もうちょっと子どもに任す部分があってもいいのかなと思います。むしろ子どもの方が上手使うっていうことが一つあって、効果的な使い方ってのはもしかしたら子どもが教えてくれるかもしれないというところがあります。そういう授業のスタイルも考えられるということ。それから業務改善と言うんですか、働き方改革の点で言うと、先ほど内藤委員さんが言われたように、様々なアンケートを学校は紙で取っています。標準のフォーマットが出来れば、一番いいのですけれど、多少学校でカスタマイズできるようなフォーマットにしておけば、また後でも出てきますけれど、いじめとか不登校に関わるような調査とか、もっと言うと学校評価。毎年、保護者さんのところへ送られてきて、ABCなのか、何かチェックしてくださいとされていると思います。あれも、もしかしたらネット上で答えることができるかもしれない。今、保護者もこのツールを非常に便利に使っておられるっていうことを上手く使えば、もう少しいろいろな場面で紙を止めて効率的な使い方ができるのかなと思います。毎日の欠席連絡もそうで、このタブレットパソコンの活用とは違うんですけれど、そういうシステムが教育委員会の方にはあって、全部の学校までは使えていない状況です。そういうことをもうちょっとこううまくこちらも伝えていくともっと楽になる部分が出てくるかな。メディアが与える健康への影響みたいなことはこの前、幼稚園の保護者さんの団体が企画して開催された幼稚園教育振興大会というのがありました。私、行って講演を聞かせてもらいました。県立大学の先生のお話でしたが、前頭葉の発達に非常に悪影響があって、特に3歳までにどれだけメディアに接触させるか、あるいは、そのことで親子の関わりが少なくなると非常に前頭葉の発達がこう限定されるような内容でした。そのことが自分を律するということができない子になってはいないかと、そういう話でした。私ども学齢期の子どものところをいろいろやっているのですけれど、もうちょっとその前の時期、もっと言うと子どもさんを育まれたところの親さん方へのアプローチというか、何か啓発みたいなのも必要なのかなと。

後ほど出ます不登校の理由が多様化しているというところの一つに、もしかしたらそういう部分もあるのかなと思って話を聞かせてもらって、いろんなことを考えさせられますね。このICTの活用についてはですね。うまく使える部分と逆のデメリット部分をどちらが対応しいくかというところと両方考えていかなきゃいけないと思っています。

(飯塚市長) 議論されて、時間が来ました。次に行こうと思います。ICT支援員の派遣について3人役ではというような話もあったと思います。現在行っている支援内容ですけど、まだ他に支援の仕方があるんじゃないかというようなご意見もありました。そういうところはまたしっかりと人数を増やしていく。今の中でそういうことをやってもらう、人数を増やす中でそういうことをやってもらうのか。このアンケートを見ても、半分ぐらいなところですので、この底上げをしなきゃいけない取組かなと思います。また、そこから先に向かって行って、内藤委員が言われたようにクラウドとで作られたものを誰もが共有して使っていけるような環境を作っていくっていうのも、さらにその先にあるICTを活用したタブレットの使い方になっていくのかなというふうに思っています。先生方の研修などをまずしっかりとやっていく必要があるというふうに思っています。引き続き、よろしくお願ひしたいと思っています。アンケート結果などの進捗というのは、教育委員の皆さん方にお知らせするようなことはあるんですか。

(福間学校教育課長) いかに進んでいるかというところは、ぜひ報告しながらやっていきたいと思っています。今後必要に応じて、例えば定例会議等で報告させていただきたいと思っています。

(飯塚市長) 低学年については、タブレットが少し重たいですね。5年生がたまに家に持って帰ったときに持ってみたら、なかなか重たいと思ったりします。小学生はそういうところも気を使っていかなきゃいけないのかなと思っています。いい活用ができるように、これからも取り組んでいきたいと思っています。それでは、次の出雲科学館のさらなる充実についてということで、科学館から説明をお願いしたいと思っています。

(2) 出雲科学館のさらなる充実について

(鬼村出雲科学館長) (資料を用いて説明)

(飯塚市長) 先月の定例教育委員会前の時間に理科学習の視察をしていただいているとのことを聞いています。感想を含めてでも結構ですので、ご意見を願ひします。

(川田委員) 20周年記念講演会に招いていただき、吉藤オリィ氏の講演は本当に感激しま

した。子どもがいろいろ質問していたのがとても印象的でした。「何が一番苦勞しましたか」という質問に対し、「自分がロボットを作ったときに、人が動かすロボットはロボットではないと言われた」と話されました。理系的な考え方をすれば、テクノロジーを駆使すれば、自分で自ら動く、AI、人工知能を持ったロボットと思うのですが、このロボットの考え方には、理系・文系もない発想が人を救いたいというところから始まっていました。科学というと理系的な考えだと思うのですが、子どもが小さい頃から科学館を利用させてもらっていました。私の3人の子は理系には行かなかったが、科学館が身近にあるということでのなじみがあります。文系を選択したけれど、今でも科学館のことを話してくれます。科学館が身近な存在で、私も子育てが終わったら、科学館に行ってみたいなという気持ちも出てきます。そういうときに生涯学習としての科学館の役割もまたあるのではないかと思います。吉藤さんの講演を聴きながら、こういう講演を市民がもっと聴けるようになるといいなと思いました。社会の弱者と言われる人たちの助けになりたいと考えている子育てを終わった世代で力になりたいと思う人たちのきっかけにもなるかもしれないと思います。テクノロジーとは程遠い私でもそのように思いました。そういう意味でも開かれた科学館であって欲しいと思います。もっと身近な生活に密着したような講座がたくさん開かれたら、もっと関心が高まるのかなと思ったりもしています。毎月チラシを頂いて見てはいますが、なかなか行けていない中、今回いい機会をいただき、ありがとうございました。

(飯塚市長) 吉藤さんの講演は本当に良かったと私も思っています。先般、入館者の300万人目となった方は地元斐川のお子さんと、妹さんも一緒に教室に参加するためにお母さんが連れて来られていました。よく来ていらっしやっていて、いいなと思いましたし、関心を持っている兄がいることで妹もついてきて、お母さんもそこにいて、自分もやりたくなることで生涯学習にもなっていくと思います。そうした循環がうまく科学館を中心にできている。授業で関心を持ったお子さんに来てもらうことで、家族などに広がっていくような、うまく循環ができていくといいなと、300万人の式典で感じたところです。それが充実するように講座をさらに充実していく取り組みは何かありますか。

(鬼村出雲科学館長) 生涯学習系の事業については、コロナの関係もあり人数を多くするというところは難しいところがあります。先ほどお話がありました身近なことを素材・テーマにということは意識をしながら行っています。一方で、大人向けの教室をやってみるということも考えています。一度にはできませんが、少しずつやっていきたいと考えています。

(飯塚市長) 内藤委員。

(内藤委員) 理科学習を見学させていただき、非常に面白いことをやられていていいなと思

いました。子どもたちにも笑顔がありましたので、今後もやっていってほしいなと思っています。理系人材の育成という部分でわからないところがあります。どういった人材の育成を考えているのか。高校と連携を取って、どういった人材を育てたいと考えているのか、本当に理系人材ということだけでいいのか、こういった人材をというような、何か思いはありますか。

(飯塚市長) 理系の中でもたくさんあると思うのです。文系か理系かということでは、私は文系となります。経営をしていると、どうしても理系的要素は必要になってきます。そういう意味では、柔軟な発想ができるような、自分でものを作ったりとか、何かチャレンジすることによって、柔軟なものの考え方ができるということを経験しておくことは有意義なことだと思います。それを文系・理系と言うことで、単純に分けてしまうのもどうかと思います。大学の進路選択で理系に行くのか、文系に行くのかということではなくて、特に早い段階から柔軟な発想を持っていくというような広い意味でそういった人材を育てられるような環境を作っていくことが意味のあることだと思います。科学館の利用価値は、そういうところだと思います。鬼村館長。

(鬼村出雲科学館長) 必ずしも理系人材の育成だけに特化しているわけではないと思っています。地域の技術、ものづくりといった産業を担っていく人材の育成という意味で、理系的な人材を育成していくことは、出雲市、島根県の課題であると思っています。出雲科学館だけでできることではないと思っています。出雲科学館では、理科についての興味・関心を高めることを行い、島根大学や高専などと連携しながら興味・関心をそういった方面につないでいくというようなこともあるであろうと思っています。先日、市内の小学校2年生の児童が町探検ということで出雲科学館を訪問されました。事前の質問に「科学とはなんですか」という質問がありました。根本的な質問ですが非常に難しい質問だなと思いました。質問は出なくてその日は終わりましたが、これは科学館の職員一人一人が考えるべきことだなと思っています。出雲科学館でやっていることは、どちらかと言うと自然科学の分野が多くなっています。大きく言うと社会科学、人文科学とあらゆる分野に関わることだと思います。最終的には、科学的なものの見方、考え方ができる人を育てていく、その先に理系人材があると思いますし、もしかしたらそれは文系でも必要な考え方ではないかと思っています。そういうことを意識しながら事業を組み立てていけたらと思っています。

(飯塚市長) 内藤委員。

(内藤委員) 今話を聞いて、ようやく地元企業というようなところとつながってきました。科学館では、いろいろな教室などを開かれる。地元企業で「自然科学」に近いところも

いろいろあろうかと思います。そういった企業にも来てもらい、科学館を使っていろいろな講習をしてもらいたいと思います。女性の活躍というところは、私も重要だと思います。女性が科学に向かうというところをもっと作り上げていってもらいたいと思います。難しいとは思いますが、島根大学などと協力してもらって、理系の方に向かっていってもらいたいと思います。

(飯塚市長) 杉谷教育長。

(杉谷教育長) 将来の職業が何になるかは別として、先ほど館長が説明したような、考え方ももの見方ができる人材を育てていくということだと思います。もう一つは、内藤委員も言われたように、市内のいろいろな方に来ていただいて講師をしてもらうことによって、キャリア教育というのでしょうか、市内にこんな人、こんな会社があったり、こんな仕事をしているところがあることを知ってもらう。職場体験や職場調べで、子どもたちはいろいろしていますが、内容が限られています。知らないところに実はすごい人がいるということが科学館の学習を通して感じたり、知識を得られたりすることでもキャリア教育の面を含めて大事なことかなと思います。例えば、内藤委員さんの会社に女性の技術者がいらっしゃれば、その方に講師をしてもらうとか、市内のIT関連企業など、それこそIターンで来られたような方にこの魅力を語ってもらい、授業の中で支援や手伝いをしてもらうとか。市長も中学校訪問で、出雲の潜在力などについて話をされていますが、それを実感できるような場になるといいと思います。それを聞いたから必ずそちらに向かうという話ではないのですが、知らないことを知るというしかけは必要だと思います。科学館の職員には、いろいろな職歴あるいはユニークな経歴を持つ方もあります。そういう方が自分の経歴を生かして、子どもたちに講義などをするのも、魅力かなと思います。いろいろなことが考えられると思っていますので、地元のいろいろな方がそこに関わってもらうというしかけが必要かなということを感じました。

(飯塚市長) 金築委員。

(金築委員) 先月、科学館の授業を見させていただき、子どもたちが楽しそうにいきいきとやっていました。一体感というか、臨場感というか、みんな頑張っているんだぞという感じがあって、先生も一生懸命やっておられて感心しました。こんな楽しい授業があるんだと思いました。一方で、これを見れない不登校の子もいるんだなと思いました。こういう授業に参加できたら、気持ちも変わってくるのかなと思いました。そういう仕組みはできないのでしょうか。その場にいるのが一番いいのですが、そういう空気が伝わってくるような、その感じが伝わって行ってみようかという気持ちになったらいいかなと思いました。1・2年生は理科の授業がないので、3年生から科学館に行くということ

でした。理科の授業がなくても、行っていいと思っています。1・2年生が興味を持ちそうな、何かをしていただくといいかなと思います。忙しくて大変だとは思いますが、そういう事業をしていただくと、子どもたちが小さいときから理科に興味を持って、3年になるのが待ち遠しいと思ってもらえるといいのかなと思っています。あの日、親子連れで一組、お父さんが子どもを連れて、手持無沙汰でおられた。休みに連れてこられたと思うのですが、小さい子がもっと楽しめるようなことがあるといいな、何かできるといいなと思って見ていました。もっとたくさんの方が出雲科学館に来られるためにも、イベント的なこと、講演会プラスイベントをして、もっともっと来やすい雰囲気が出てくるといいかなと思います。道がちょっと複雑で、なかなか行けない人もいるかもしれない。気軽に来れるようどんどん足を運んでもらえるような仕組みづくりも必要かなと思いました。

(飯塚市長) 鬼村館長。

(鬼村出雲科学館長) 不登校の子にも科学館学習をというご意見がありました。現在、レッツ理科学習という事業があり、不登校の子や不登校傾向の子を対象に実施しています。年間何回もというわけにはいかないが、実施しているものがあります。出ると言っても出られない子もいますが、そういう機会を設けています。特別支援の子どもを対象にしたリカム科学教室という事業も実施しています。内容は、理科学習とは異なりますが、科学の体験の機会を設けている。市内の小中学校の児童生徒が、どの子も年に1回は科学館に来ていただくということで事業を展開しています。

(飯塚市長) 高橋委員。

(高橋委員) 先月科学館に行かせていただきました。子どもが、今日は科学館学習で、水筒がいるという話はしますが、今日、何を学習するのかは聞けないままいつも出ていってました。授業しておられる先生の中にお一人知っている方がいて、多伎中学校におられた先生でした。こんな楽しい授業をしてくださっていたんだと思いました。科学館に行ったからではなくて、学校に持ち帰っても、興味を持てるような、楽しい授業にしてもらえるいいと思いました。例えば、今日は子どもたちが科学館学習に行くから、保護者の方も見学どうですかという機会があると私も行って見たかったなと思いました。学校では必ず親子活動というのがあります。親子活動で何をしようかと考えておられる方もあるので、例えば科学館事業の中で親子活動でこういうことをしてみませんかということを提案していただけると行きやすくなると思います。そういうことも含めて、人が来やすくて、もっともって行ってみたい科学館にしていただければと思います。

(飯塚市長) 提案いただきましたけど、いかがでしょうか。鬼村館長。

(鬼村出雲科学館長) 理科学習を保護者に見学できるようにということについて、今は実施していませんが、小・中学生を対象に実施している授業の内容を「大人のための理科学習」ということで、実施しているものがいくつかあります。参加者はそう多くないですが、実際に子どもがどう学んでいるのかを見たいということとは違いますが、そのようなものがあります。個人的には、そういう機会があるといいなと思います。子どもたちの集中を切らさないようにしながら、一部の方でも受入れができるといいなという思いはあります。親子活動ということでは、地域子ども団体科学教室という事業をコロナ前には実施していましたが、今は休止しています。今後再開できれば、また参加していただくことができるかと思っています。

(飯塚市長) 科学館では、特色ある事業を実施しています。みなさん一様に、子どもが笑顔で喜んで授業を受けていたというのが、何よりの評価だなと思う。それがずっと続くように、ぜひしっかりと取り組んでいきたいと思っています。去年の今頃、日本ジオパーク委員会からの、(島根半島・宍道湖中海ジオパークの)再認定があった。科学館にもジオパークの委員の皆さんが来られて、そこでの取り組みを見学された。今年、再認定していただいたわけですが、その中でもいろいろな評価項目があって、出雲科学館の理科学習は非常に特色があり、いいものだという評価をいただきました。このジオパークは、松江と出雲が一緒になってやっていますが、ぜひ、松江のほうでもやってもらいたいとありました。これはなかなか、松江の子どもをこちらで受け入れるのは不可能ですが、そのような活動をしていること、出雲での特色ある活動をしていることを非常に評価されている状況です。ぜひとも続けていけるようにと思っています。そのような評価をしていただいたということを紹介させていただきます。それから、キャリア教育、企業のほうですが、先ほど、柔軟性と言いましたが、企業側としては、次を担っていただく人材を育てて欲しいというのは、間違いなくあります。世界と戦っている技術をたくさん持っている会社が市内にはあります。それをいかにして知ってもらおうかというのは、非常に大切なことだと思います。どうやっていくのかは、企業がたくさんある中で、整理も大変だと思うのですが、そのような紹介の仕方は、これから重要なことだと思っていますし、そういうことができればいいなと思います。

(3) 不登校対策について

(飯塚市長) それでは、次の不登校対策に移りたいと思います。児童生徒支援課の松井課長から説明をお願いします。

(松井児童生徒支援課長) (資料を用いて説明)

(飯塚市長) それでは早速、意見をいただきたいというふうに思います。どなたからでも結構でございますので、よろしく願いいたします。川田委員。

(川田委員) 早期対応のところですね、不登校相談員さん、その下の不登校対策指導員さん、いろんな名前が出て来て、児童生徒支援調整員さんですね、どういう方々なのか教えてくださいませんか。

(飯塚市長) 松井児童生徒支援課長。

(松井児童生徒支援課長) 不登校相談員は、学校の方で配置しております。先ほど言いました別室というところで、子どもさんがおられると、そこで支援を行ったり、あるいは家庭訪問に一緒に行くとか、そういった形で、学校現場で基本的には対応していただいている者でございます。

(飯塚市長) 川田委員。

(川田委員) 先生の中で、相談員という形を役割としてやっておられると思いますが。

(飯塚市長) 松井児童生徒支援課長。

(松井児童生徒支援課長) これは別の教員ではない者をですね、教育委員会で任命して配置しているものです。

(飯塚市長) 川田委員。

(川田委員) わかりました。教員免許はお持ちですか。

(飯塚市長) 松井児童生徒支援課長。

(松井児童生徒支援課長) 教員免許はお持ちなんですけれど、うちで採用しております。

(飯塚市長) 川田委員。

(川田委員) わかりました。教育委員会から、各学校にそういう方が派遣されているというか、配置されてる訳ですね。

(松井児童生徒支援課長) そのとおりです。すべての学校ではないのですが、不登校の児童生徒が多いような学校を重点的に小学校 12 校、中学校 8 校に配置させていただいている状況です。それから不登校対策指導員というのは、引きこもりがちですね、なかなかその家から出られないようなお子さんについては、こちらから出かけて行って、まずは、家庭訪問といいますか、家庭の中で子どもさんと少し関わりを持ちながらコミュニケーションを取って、最初はいろいろなちょっとした遊びとかですね、そういった関わりの中で関係を作ります。慣れてもらえると、少しずつ外へ出るんです。体を動かす運動でありますとか、まずは外に出るきっかけをそういった形で少しずつ作って行って、家から離れていただきます。そういった子どもさんが集まるような場があります。そういった場で複数の子どもさんとの関わりを徐々に作っていきます。段階に応じて、そういった支援を行って、将来的にはもちろん支援センターへ通えるとか、あるいは学校への別室登校とかそういったところでも含めて、まずは、外へ出かけれるようにするように関わるのが、この不登校対策指導員です。教育委員会に 3 名おります。児童生徒支援調整員というのは、学校からこういった子どもがおられるということで、相談があった場合に学校と保護者と子どもの様子を状況把握しながら、支援センターが支援の窓口でいいのか、あるいは、状況を見て、さきほど言いました不登校対策指導員が支援に関わる方がいいのかなど、学校や保護者と調整しながら、そういった者を決めていく、そういった関わりをする者です。そういった形で支援をさせていただいています。

(飯塚市長) さきほどの答えを踏まえた中で何かあれば。川田委員。

(川田委員) その方々は、教員免許を持ってらっしゃるということですね。

(松井児童生徒支援課長) 教員免許はあります。

(飯塚市長) 川田委員。

(川田委員) 特に、心理カウンセラーの方ではないということですね。

(松井児童生徒支援課長) 心理カウンセラーは、心理相談員となっています。

(川田委員) そういう研修とかやってらっしゃるんですか。

(飯塚市長) 松井児童生徒支援課長。

(松井児童生徒支援課長) 毎年、研修会を設けております。小学校は、県の方からの配置も受けておりますので、県の研修会もございます。また、出雲市全体の支援センターのスタ

ップも含めての合同研修会、不登校に関わる支援スタッフ全員の研修を行い、定期的に重ねてスキルアップと、情報共有をしています。

(飯塚市長) 川田委員。

(川田委員) はい、ありがとうございました。

(飯塚市長) 高橋委員。

(高橋委員) 学校訪問させていただいた時に、結構な不登校の方たちがいるなという印象がありました。理由は、様々であろうと思うのですが、根本のところをやはり知るといえるか、解決していかないとその子たちが学校に行けるようにはならないんじゃないかなと思います。学校に行けないとしても、その子たちも必ず大人になっていかないといけないと思うので、何か教育をきちんと受けれるような環境を整えていただきたい。先ほどのICTの活用で、教室ですべてではないのですけれども、こんな授業をしてるよってちょっと参加ができるような形がとれば、何かのきっかけで出れたりってということもあると思います。そういった原因が、昔でいう、いじめられてるからだけではないんですよね。今は、いろいろあるとは、聞いてるんですけども、そういった様々な問題にどういうふうにとちょっと取り組んでおられるのかなと思うんです。

(飯塚市長) 松井児童生徒支援課長。

(松井児童生徒支援課長) 先ほどおっしゃいましたように、不登校の要因は、文部科学省の調査によりますと、学校に起因するもの、あるいは家庭に起因するもの、本人に起因するものなどの分類があります。それは、あくまで学校の方で、こういった要因じゃないかというかそういうふうにしてるということであって、本人が、そうですというものではないのです。けれども、そういう中で、例えば生活の乱れでありますとか、そういったものが原因だとか、基本的に一番多いのは無気力だとか、不安だとかっていう、そういうふうな要因が全国的にも一番多くなっている状況です。家庭環境でいいますと、親子の関わり方がうまくできないであるとか、友人関係のそういった問題など、全国的には高い割合になっている状況があります。要因は、子どもさんそれぞれ複雑に絡み合っていて、重複しているものです。小学生の低学年でありますとか、あるいは中学生ぐらいになると、また全然状況ですとか、本人の意思でありますとか、そういったものもいろいろあって、一概に言えないとこだと思います。おっしゃったように、なかなかその集団に入りにくい子どもさんがいます。今、GIGAスクールでタブレットを子どもたちが持っている状況ということとは、ここ近年、環境が大きく変わったことだだと思います。そういった意味では、今まで

は、教室そのものが怖いとかですね、そういった集団に入ること自体の精神的なストレス、そういったもので、教室に入れないと、学校が怖くて行けないというような子どもさんのような状況があると思います。自分でカメラを通して教室の中の様子が見れるというようなこと、例えば、別室登校した子どもさんが教室を見て、自分が想像で怖いと思っていたけれど、カメラを通して見ることによって、客観的にそんなに怖くないという気持ちになるとか、なぜ、自分はそういうふうな気持ちになってんだらうということ。そういうきっかけになって、復帰されたこともあると聞いております。子どもさんによっては、そういう一つのツールが学校復帰や教室に戻るきっかけになるということはあるんじゃないかなと思います。アウトリーチ型で支援を行っていますが、他者がそこに出かけていく時間でありまして、そういったことを考えると本当に今のスタッフでは限られた子どもさんにしか関われない状況です。そういったツールを利用すれば、何時から何時まで遠くにいながら、その間、顔を見ながらいろんな話ができたり、そういう子どもさんに関わる時間を効率的に使える可能性があります。新しい不登校対策を、これからの可能性ということで研究していけば、いろいろな効果も期待できるんじゃないかと考えております。そういった先進事例を調べる中で、試行錯誤ではありますけど出雲市としてもいろんな取り組みをしていかなきゃいけないと考えております。

(飯塚市長)高橋委員。

(高橋委員)ありがとうございました。

(飯塚市長)ICTの活用ということだと既存のタブレットの活用だけではなくて、今年の春には、副教育長と担当の松井課長などと一緒にeスポーツを見に行きました。eスポーツをやっておられるところでもそういうことをやっておられて、そこで少しずつ慣れていって、学校の方に帰っていくなど、そういう事例も一緒に見学をさせていただきました。オンラインを使ったいろいろなやり方があるなというふうに思いました。科学館の20周年の際に講師をしていただいた「Orihime」とかですね、本当に障がいがあつて寝たきりで学校にはなかなかいけないんだけど、機械を通して学校の様子がわかって、一緒に授業に参加できるというような様々な活動の仕方が、今は、あると思います。そういうことも含めて、不登校対策にどのような効果があるのかというところは、今、一生懸命、他市の事例とかと言う話もありましたけども、我々も研究していきたいなというふうに思っています。内藤委員。

(内藤委員)様々な理由があつて不登校の子がいるっていうのは、理解できるのです。まず前段で、学校それぞれで不登校、不登校じゃないの、この差が激しいっていうところがあります。学校に「なんでですか」と聞くと、「わかりません」という答えしか返ってきませ

ん。それが僕は問題じゃないかなと思っています。もう少し各学校で分析をしてもらったほうがいいんじゃないのかなと。そこからいろんなことが判明してくるっていうことがあるんじゃないのかなと思っているのですけれど、その辺りはいかがでしょうか。

(飯塚市長) 松井児童生徒支援課長。

(松井児童生徒課長) 学校においても、そういった傾向とか、そういうことは当然現場も感じる部分があって、いろいろ検討してる部分もあると思うのです。現場は、個々の子どもさんが状況も違う中において、対応でありますとか支援とかに非常に一生懸命といった部分もあります。各学校での分析もそれは現場として、肌で感じる部分もあると思います。オール出雲市ぐらいの規模で、ある程度の母数の中で、ある程度の傾向とか対策を考えていく必要があると思います。大規模校で多いとか、小規模校では少ないなどと、言われます。小学校では、割合で言いますと小規模校では少ないということもあります。大規模校の率が多いということがあります。中学校では、大規模校よりも中規模校の方が割合が多くなります。小規模な所は少ないという状況です。出雲市の中では、地域性と言うのはほとんどないのです。規模感あるいは小学校何校が集まって一つの中学校になっているかで多い少ないみたいなところはあまり変わりがない。1校から1校のところと3校の小学校が集まる中学校でも、それほど率的なものは変わらない。そういった部分での中1ギャップがより多く発生しそうな、他の小学校の児童とのコミュニケーションをとらなきゃいけない状況に置かれる子どもさんが多いかというものも、今のところ、数字的にはあまり大きな差が出てないということです。それだけやっぱり原因は、なかなかつかめないのじゃないのかなと思います。そういったところを教育委員会としても、出雲市全体を考えながら、また、個別の学校にも相談したり、状況を聞きながらやりたいと思っています。学校だけでの分析だけでは、逆に対応しかねない部分もあるのかなと思っています。

(飯塚市長) 内藤委員。

(内藤委員) 出雲市全体というのも、非常に重要なかなとは思っています。学校それぞれの特徴もあるでしょうけど、そういうものを蓄積させていくのが重要なかなと思ってるのです。いろんな事例があつてついでにいうものを。それが積み重なって、この出雲市のデータになっていくわけであって、そこでようやくこういうやり方をすれば、不登校がなくなるかもしれない。そういうやり方、いろんなやり方があるんじゃないのかなと思います。今、学校それぞれが「わからない」と言われます。教育現場の人がそれを言っていたら、誰もわからない状況になってしまうのじゃないかなというのが、僕の考えです。無理なことはわかりましたけど、ただ、そういった各学校で分析していくってことの重要性は、あるんじゃないのかなと思っています。

(飯塚市長) ありがとうございます。安井副教育長。

(安井副教育長) 先ほどの内藤委員の意見に、少しお答えをいたします。国へ出す理由の区分があります。学校において、どれに当てはまるかを決めています。いじめを除く友人関係の問題、学業の不振、それから生活リズムの乱れ、遊び非行、無気力・不安ということがあります。こういった分類の中で、先ほど申しあげましたように無気力、不安が約半分ぐらいということが多いわけです。これが、どれか一つに当てはまるという状況では実際はありません。子どもに聞き取りをしても、学業不振から生活リズムが乱れて、無気力になった子もいますし、今となれば、なぜ行きたくないのかわからないという子もいます。そういった意味で、学校個々に聞き取りをしたり、必ず週に1回はアプローチするようにしています。その中で本人自身がわからないというケースが非常に増えるということが社会的大きな課題ではないかなと思っています。これについては、学校教育だけで解決するものでもないかなと思います。学校でできることを今やっていかないといけないということです。ご意見等も参考にして、少しでも解決に繋がるような分析ができるようにやっていきたいというふうに思っています。

(飯塚市長) 金築委員。

(金築委員) 市長に質問ですけれど、今まで学校訪問されておられると思います。教育支援センターの方に訪問されたことがありますか。

(飯塚市長) いや、まだです。

(金築委員) これからされる予定がありますか。

(飯塚市長) 機会があれば、行きたいと思います。

(金築委員) 私も実際行ったことがありません。学校訪問で行かれたの日も都合で欠席でした。実際に行っておられる生徒さんたちの様子を見たり、聞いてみたいと常々思っております。不登校の方が、これだけしか行っていないというか、これだけしか行っていないのかなって、ちょっと思うところもあります。素朴に疑問に思ってます。学校行きたくなかったら、行かなくてもいいよという考えも若干あります。死にたくなるぐらい辛かったら逃げなさいと思っているのです。向陽中学校の10周年記念公演で副島淳さんのお話を聞かせてもらいました。彼もいろいろいじめに遭ったりして辛い思いをしていたらしくて、その話を聞いていました。彼自身も教育委員会さんの前ではなかなか言えないですけど、

逃げなさいと、生徒たちも辛かった逃げているんだよ、逃げ道もあるんだよということを知って欲しいかなっていう気持ちもあります。そういうことを本当は親の前でも言っちゃいけないのかなと思うんですけれども、思ってます。実際、本当に自分が死ぬぐらいだったら逃げたほうがいいよっていう風に、思っています。逃げたかったら、家で閉じこもっても、とりあえずいいよと。ただ、いろんな体験をさせてあげたい、社会経験をさせてあげたい、子どもたちが家でいるままで、大人になって欲しくない。楽しいことも悲しいことも、それこそ科学館でいろんな友達とやったことなど、体験をして欲しいんですね。体験する場所は、学校が一番望ましいのです。けれども、学校に代わるもの、例えばフリースクールはある、支援センターはあるのですけれども、なかなか行けないという現状がある。実際民間の方と共同して一緒に何かすることも考えてもいいのかなと思っています。実際これだけのスクールカウンセラーさんたちでは、手が回らない部分もあるとは思いますが。そうするとやはり民間の方とかお店屋さんの力とかも借りていいと思うのです。その中でいろんなことで子どもを少しでも出してもらえそうな状況が出てくれば、これと一緒に参加することになり、それができれば少しずつ社会参加もできていけるのかなと思います。民間でもやりたいって方もいろいろおられたり、協力したいという方もたくさんいらっしゃるのです。子どもと一緒に不登校のことを何かしていきたいとか、お母さんと一緒に何かしたいとか。悩んでおられるお母さんもおられるので、カフェでもしようとか、お茶でも飲もうよとか、そういう考えがあります。気軽にまず行ける状況、社会に出れる状況から作っていかないとこれだけではちょっと難しい部分もあります。行政が頑張っておられることは、分かるのですが、なかなか改善しにくいのかなと思っているのが正直なところです。なので、もうちょっと民間の方の意見を聞く機会も作っていただいて、そういう意見がある方もいらっしゃるのです。ぜひ討論会でもいいですけどトークの時間いただければと思っています。母子全国大会というのがある、出させてもらったのですが、意外と知られてないのが産後のお母さんの自殺率、産後鬱で自殺される方がすごく多いと聞いて、何でそうなっちゃったの、一番子育てが楽しい時じゃないかと思うんです。お母さんが孤立している感覚とか、旦那さんもイクメンと言いますが、参加も少ない中、孤立してワンオペで家事をしているなか、いろいろ相談もできず、命を絶ってしまうということが非常に多くなっている現実を知りました。その不安なお母さんたちが子育てするにあたって、子どもも不安がうつってしまう、育てにくくなっちゃうのかなと思うのです。学校はだけじゃなくて、産後もあるかもしれない。きめ細かな切れ目なきケアをしていただきたいと思います。不登校の子どもたちの不安感に、たぶんお母さんの不安感が反映していると思うのです。そういったところがフォロー出来ていけて、出雲市全体が、お母さん、お父さんに優しい世界になって欲しいなと思っています。私が教育委員になったときは、親子が笑って過ごせる出雲市にしたいと言うようなことを言っていたけれど、何もまだできてなくて、何か少しでも一助になればと思って模索はしているんです。なかなか形できなくて、ただ、民間のパワーもすごいよということは知っていただき

たいのです。お母さんたちすごくパワーがあって、すごく感心しています。一緒に何か頑張ってやっていきたいなと思わせるような人もたくさんおられます。そこをちょっと吸い上げていただきたいと思います。

(飯塚市長)ありがとうございます。民間の方でいろいろな活動していらっしゃるっていうことは、私も承知しています。フリースクールっていうのは、学校が把握しておられて報告書にあがるところは数が少ないんですけども、そうじゃない活動をNPOの人だったりとかが、関心を持っておられる人が増えてるなっていうことは、聞いています。実際やっておられる方もお会いしています。そういう方たちの情報をもう少し集めて、全体的に多様な取り組み、支援、活動について、どこでどういう方々がいらっしゃるのかっていうことを把握する必要があるなど改めて思っているところです。討論会というよりも、まずは、その情報をしっかりと収集していくことが必要だと思ってます。あわせて、そういう方たちと一緒にどういうことができるのかなということを考える機会があるといいというふうに思っております。おっしゃるように民間の方が、関心を持って、非常に心配をしておられる方がいることを承知しています。産後ケアの方も、いろいろ福祉の方と一緒に取り組んでいるところです。この辺も充実ができるように、やっているところですので、もう少し、いい成果が出るようにしていきたいというふうに思っています。ちょっと熱心なご議論をいただきました。この不登校については、議会も含めて関心のあることですので、しっかり取り組んでいきたいと思います。私、早期対応というところですね、早く発見してこれをどうして行くかってことが、大切なことだと思います。全体的なこともあるのでしょうけれども、個々の生徒児童によって状況が違うわけですから、それをしっかりと把握して行って寄り添ってあげることが大切なことであると思います。そのためにもこの早期対応は多分大体できてると思うのですけれども、学校できちんとした対応ができるということが、今後、数が増えていかないような、一つのポイントかなと私はちょっと思っています。その辺のことはまた学校といろいろときちんと連絡取りながら、やっていくように努めていきたいというふうに思っています。ということで、私の方の進行は終わらせていただきます。

(常松教育政策課長)たくさんのご意見いただき、どうもありがとうございました。事務局といたしましても、今日いただいたご意見、ご提案をもとに、また検討いたしまして、これからの事業を進めていきたいと考えております。それでは最後に、教育長が一言ご挨拶を申しあげます。

(杉谷教育長)大変熱心に議論いただきましてありがとうございました。当初予定してた時間10分以上オーバーしてしまい、ご迷惑をお掛けいたしました。大変貴重な意見をたくさんいただいたと思っております。私がまとめて思うことは、やっぱり状況なり、データな

りそういうものをしっかり集めて蓄積をして分析をするってということと、もう一つは、学校だけじゃなく、教育委員会だけじゃなくて、地域とか民間という言葉が出ましたけれども、外部の力をうまくこれから活用していくってことかなというふうに思いました。この二つを頭に置いて、これからこの三つのテーマに限らず、教育委員会の方で、もう一度いろんなものを練り直して、来年に向けていきたいというふうに思っております。大変ありがとうございました。

(常松教育政策課長) それでは以上をもちまして、第2回総合教育会議を終了いたします。どうもありがとうございました。

(5時12分終了)